

研究論文

中山間地域で生活する人々の孤立感

The Isolation of People Living in Depopulated Rural Areas

吉野明子 (Akiko Yoshino)* 野嶋佐由美 (Sayumi Nojima)*

要 約

高知県中山間部にあるI町の住民を対象として「生き生き健康づくり」の調査を行い、その一環として、本研究は中山間地域で生活する人々の孤立感を明らかにすることを試みた。

中山間地域で生活する63名を対象としており、健康や日常生活、人との付き合い、生き甲斐などについて聞き取り調査を行った。

データ分析の結果から、中山間地域で生活する人々は、【自分自身が動けなくなることに根ざした孤立感】【家族が動けなくなることに根ざした孤立感】【置き去りにされる孤立感】を抱えていることが明らかになった。これらの孤立感を増強する要因として、①地理的環境、②社会における中山間地域の位置づけ、③子どもとの距離感などがあつた。このような孤立感に対して、①夫婦で互いに支え合う、②近隣の人と強いつながりを作る、③兄弟を頼りに思う、④子どもを最後の砦とする、という孤立感に耐える取り組みを行い、自らの心の健康を守ろうとしていた。特に、近隣及び近所に居住する兄弟を家族の拡大として捉え、対人関係の基盤とする、②近隣の人と強いつながりを作る、③兄弟を頼りに思う、は中山間地域だからこそ育まれ続けている特徴的な孤立感に耐える取り組みであることが示唆された。

キーワード：孤立感・中山間地域・老化

I. はじめに

中山間地域の人々が直面している問題として、人口流出・過疎化・高齢化・耕作放棄の進行、生活単位としての集落の崩壊化などがあげられている。中山間地域の人々が、このような問題に直面しつつ、どのように自らの健康を守り、生活をしているか明らかにすることを目的として、ヘルスプロモーションの視点から調査を行った。すなわち、健康状態、受診行動、自分自身・家族の健康維持・増進のための行動、生活状態、家族との交流・関係、地域での交流、生きがい、求助行動などを明らかにする調査を行った。

本報告は、この研究調査の中で、心の健康に注目したデータ分析の結果から、中山間地域の人々の心の健康面で、特異な点として孤立感が抽出されてきたので、孤立感について報告をする。

老人の孤独感は注目され研究がなされ、孤独感とは、社会的関係の欠如から派生する、不快であり苦痛を伴う、主観的な体験として

論じられている。孤独感は、個人的な要因や対人的な要因からも影響を受けるが、状況的要因からも影響を受ける。重要他者との離別や物理的な距離感などが孤独感を派生する源となっている。さらに、物理的に隔離された場所に住んだり、働いたりしている人は孤独感を持ちやすいと言及されている¹⁾。客観的に社会状況的に孤立していることに由来した孤独感に関しては、孤立感の方が適切であると判断し、また、中山間地域で生活する人々は孤独感よりは、孤立感のほうが適切であるので、本研究では孤立感という概念に焦点を当てて、中山間地域で生活をする人々の心の状態を記述することとする。

II. 研究方法

1. 対象者とデータ収集方法

高知県の中山間部にあるI町3地区で行われた「いきいき健康づくり」調査の対象者のうちインタビューできた人68名を対象とした。半構成的なインタビューガイドに従って、健

*高知女子大学看護学部

康について(健康状態についての自己評価、受診行動、自分自身・家族の健康維持・増進のための行動)、生活について(毎日の生活、家族との交流・関係、地域での交流・活動)、心の健康について(生きがい・楽しみ)、求助行動について、将来の方向性について、1時間～1時間30分のインタビューを行った。インタビューの内容は、インタビュー終了後、すみやかに記録した。

2. 分析方法

「いきいき健康づくり」調査において、心の健康に関する、生きがい・楽しみ、親子関係、将来の展望についての発言を分析したところ、特異な点として孤立感が抽出されたため、本研究ではさらに、インタビュー内容とインタビューアーの印象から、孤立感が表れている場面を取り出し、その場面を分析した。

Ⅲ. 結 果

各ケースのインタビュー内容を分析した結果、中山間地域で生活する人々の孤立感と、孤立感を生み出している全体像が抽出された。ここでは、まず、中山間地域で生活する人々の孤立感の内容について述べ、次にその全体像について述べることにする。

1. 中山間地域で生活する人々の孤立感

中山間地域で生活する人々は、【動けなくなることに根ざした孤立感】【置き去りにされる孤立感】を有していた。【動けなくなることに根ざした孤立感】には、「自分自身が動けなくなる」と「家族(多くは夫婦のどちらか)が動けなくなる」が含まれていた。

1) 自分自身が動けなくなることに根ざした孤立感

中山間地域で生活している人々は、例えば、「年をとって動けなくなることが不安である」「全く歩けない状態で、寝たきりになってしまったらこれからどうしようと思う」「やはり年をとることは不安である。年をとって1人は心細い、動けなくなると困る」などと語っていた。本研究の対象者のほとんどのケース

が、同様に自分が動けなくなった状況を考え、動けなくなることに対する不安を言語化し、動けなくなることにより生じる孤立感について語っていた。また、実際に1人で居た時に転倒した体験を持つケースは、「骨折した時動けず、その場で1時間夫の帰りを待った」と語っており、「17時以降は家を閉め切って外に出ないようにしている。もし転倒しても、夜間では翌朝新聞配達員が来るまで誰も気が付いてくれないし、助からないので家にこもるようにしている。」と語ったケースも見られた。これらのことから、中山間地域で生活している人々は、動けなくなること、生きることを脅かす危険性があると考えていることが明らかになった。従って、自分自身が動けなくなることに根ざした孤立感は、ある意味では、生きることを脅かす孤立感とも言えよう。

2) 家族が動けなくなることに根ざした孤立感

中山間地域で生活している人々は、例えば、「妻が病気や怪我で倒れることを一番心配している」「妻に長生きしてもらわないといけない」「妻をいたわりできるだけ元気でいてもらわねば、自分が困るのだから。自分がかわいいから妻に優しく気遣いをするのだ」と語っていた。これらは、いずれも夫の立場からのものであった。家族(妻)が動けなくなるということは、夫にとって、自身の存在を脅かされることであり、自分は動けなくなっても妻に世話をしてもらいたい、そして妻には自分が死ぬまでできれば健康でいてもらいたいという思いがこめられているであろう。すなわち、家族(妻)が動けなくなることに根ざした孤立感を、夫は、語っていると言えよう。

3) 置き去りにされる孤立感

中山間地域で生活している人々は、例えば、「今は2人で元気にやれているからいいけれど、1人になったら…」と語っていた。これまで何十年も連れ添ってきた夫婦の絆は非常に強く、お互いがそれぞれを大切な支えとしているが、決してその支えが永遠に確実なものではないという気持ちも抱いている。特に、

夫の側にその気持ちが強く表れており、“先に死んだ方が得とも思う”というように率直に妻の存在が無くなった時の不安を語っていた。このように、中山間地域で生活している人々は、置き去りにされる孤立感を語っていた。また、“中山間地域が置き去りにされている感じがする”と語った者もいたことから、中山間地域で生活している人々は、単に周囲の人々から置き去りにされるという孤立感を持っているのみならず、自分の生きてきた世界が世の中から置き去りにされるという孤立感を有していることが示唆された。

2. 中山間地域で生活する人々の孤立感を増強する要因

データを分析した結果、中山間地域で生活する人々の孤立感を増強する要因として、①地理的環境、②社会における中山間地域の位置づけ、③子どもとの距離感が抽出された。

1) 地理的環境

中山間地域で生活している人々は、例えば、“住環境に関する心配がある。道路から離れており周囲に家が無い。かなり急な坂道をおりて行かなければならない。足腰が立たなくなったら家から出られない。夫婦どちらかがいなくなったら、1人で何かあったら気付いてもらえない。”“とにかく不便”と語っていた。地区自体が中心部から孤立していること、地区の中でも家同士が離れて孤立している状況から生じている。このように孤立したものの同士の結ぶものとしては、自分自身の足、足の替わりになる移動交通手段、発達した公共交通機関が必要となるが、地区において自分自身の足以外の交通手段は十分でなく、孤立感を増強させていることが示唆された。

2) 社会における中山間地域の位置づけ

中山間地域で生活している人々は、例えば、“中山間地域が置き去りにされている感じがする”と語っていた。都市化が進み、社会の中で中山間地域が開発から取り残され、社会の中から忘れられているという現実から、孤立感を増強させていることが示唆された。

3) 子どもとの距離感

中山間地域で生活している人々は、例えば、“子どもに面倒をみてもらう時代ではない”“子どもには頼らない。子どもには子どもの生活があるから。”と語っていた。このように、中山間地域で生活している人々は、子どもとの間に距離感を感じていた。その背景としては、ケース自身が自分の親をみてきた苦労があり、そのような辛い生活を子ども達にはさせたくないという思い、時代の流れも影響しており、親の面倒は子どもがみて当然という考え方の変化からも生じていることが示唆された。

3. 中山間地域で生活する人々の孤立感に耐える取り組み

中山間地域で生活している人々は、以下のような頼れる人の存在をよりどころに、孤立感に耐える取り組みをしていた。

1) 頼れる人の存在

中山間地域で生活している人々の頼れる人の存在として、「夫婦の存在」「近隣の人々の存在」「兄弟の存在」「子どもの存在」が抽出された。

2) 孤立感に耐える取り組み

中山間地域で生活している人々は、以下のような方法で、孤立感に耐える取り組みをしていた。

① 夫婦で互いに支え合う

中山間地域で生活している人々は、例えば、“お互いが相談相手、自分達だけで解決できる。”“今は2人で元気にやっているからいいけれど、1人になったら…”と語った。これまで何十年も連れ添ってきた夫婦の絆は非常に強く、最も頼りになる存在であり、お互いがそれぞれを大切な支えとしていた。

② 近隣の人との強いつながりをつくる

中山間地域で生活している人々は、例えば、“隣の家は兄弟みたいなものでとても大事。自然で当たり前なこと”“近所の人何かあったら助けてくれる”と語っており、普段の生活に関したことはもちろん緊急時に近隣の人に助けを求めるといのように、幅広く近隣の人々を頼りにしていた。特に、本研究の対象

者が生活している地区では、“鍵を閉めない。戸を開けっ放し。”“人にもよるけど、あんまり見えない時は見に行ってみようかなと思う”というように、近隣の人との間に強いつながりを形成することにより、孤立感に耐えていることが明らかになった。

③ 兄弟を頼りに思う

中山間地域で生活している人々は、例えば、“近くの兄弟を頼りにしている”“いざというときは兄弟が頼り。子どもよりも”“部落に兄弟がいるというだけで心持ちが全然違う”と語っていた。このように、中山間地域で生活している人々にとって兄弟は身近にいて普段から交流も多く、兄弟を頼りに思うことにより、孤立感に耐えていることが明らかになった。

④ 子どもを最後の砦とする

中山間地域で生活している人々は、例えば、“子どもを頼る。誰かはみてくれる”“困った時の相談は息子”と語っていた。多くの人々は、“最後は…”という言葉を使っており、自分のことが自分でできなくなった状態や終末期には子ども達にみてもらいたいという気持ちを抱いていた。

これらのことから、子どもを最後の砦として、孤立感に耐えていることが明らかになった。

Ⅳ. 考 察

本研究結果から、中山間地域で生活している人々が、どのような孤立感を有しているのか、どのような要因により孤立感が増強されているのか、孤立感に耐えるためにどのように取り組んでいるのが明らかになった。ここではまず、中山間地域で生活している人々の孤立感の全体像について論じ、次に、中山間地域で生活している人々の孤立感の特徴について考察する。

1. 中山間地域で生活している人々の孤立感の全体像

本研究で、中山間地域で生活している人々の孤立感の全体像が明らかになった(図1参照)。中山間地域で生活している人々は、【自

分自身が動けなくなることに根ざした孤立感】【家族が動けなくなることに根ざした孤立感】【置き去りにされる孤立感】を有している。これらの孤立感は、①地理的環境、②社会における中山間地域の位置づけ、③子どもとの距離感、により増強される。また、これらの孤立感に対して中山間地域で生活している人々は、①夫婦、②近隣の人、③兄弟、④子ども、を頼りとして、【孤立感に耐える取り組み】をしていた。すなわち、①夫婦で互いに支え合う、②近隣の人との強いつながりをつくる、③兄弟を頼りに思う、④子どもを最後の砦とする、である。

2. 中山間地域で生活している人々の孤立感の特徴

1) 中山間地域で生活している人々にとっての動くことの意味

中山間地域に生きる人々は、【動けなくなることに根ざした孤立感】を有していた。我々は生きている限り、ある一定の年齢を過ぎてから、身体能力の低下を避けて通ることはできない。それは、様々な形であるが全ての人に対して平等におとずれるものである。だが、特に高齢になればなるほど身体能力の低下は顕著にあらわれ、それが生命を脅かすものになったり、これまでの生活を不可逆的に180度変えてしまうものにもなりうるのである。そして、そのような状態になる可能性があることを、年を重ねるごとに身近なこととして考えるようになる。老年後期の老人の孤独感は、身体能力の低下に基づく、あるいは経済的困窮や交通機関の利用不能に基づく活動性の低下と強く結び付いているとディーン(1962)は指摘している²⁾。また、老人の孤独感には、健康状態がもっとも強く関連しているとも言及されている(Larson, 1978, Tunstall, 1967, Perlman, 1978)^{3) 4) 5)}。

さらに、動けなくなることは、多くは加齢によるものであったり病気によるものであるため、自分自身で統制していくことができるものでない。つまり、個人的統制感を喪失させる。統制感の喪失は無力感と絶望感を起こさせる(Schulz, 1976, Seligman, 1975)^{6) 7)}といわれ、これもまた孤立感へと結び付いてい

くものであると考える。強度の孤立感が長期に続くことで自殺に追いつめられたり、身体的健康を脅かすこともあり、中山間地域に生きる人々にとり、このような老化や病気によりもたらされる孤立感は深刻な問題のひとつである。

これらのことから、中山間地域で生活する人々にとって“自分で動くことができる”ということは、個人的統制感を持つことであり、生きる上で欠くことができないものであると考える。

特に、中山間地域では、農業や出稼ぎなど自分の身体を使って収入を得る人が多いこと

や、自然環境の厳しい交通の不便さの中では自分の足で移動できることが生きていくうえで当たり前となっているため、“自分で動くことができる”ことは、生きていくことなのである。従って、動けなくなることに根ざした孤立感は、中山間地域で生活する人々にとって、単に情緒的な寂しさを言うものではなく、生きることを脅かされるという要素を含んだ孤立感であると言えよう。

2) 中山間地域で生活している人々にとっての置き去りにされる孤立感

中山間地域に住む人々に固有な孤独感、主

図1 中山間地域で生活する人々の孤立感の全体像



観的な寂しさよりも、置かれた状況に起因した孤立感を強く持っていた。近所の人ひとり、またひとりと村を去っていくたびに、自己の将来を考え、置き去りにされることへの不安感を持ち、将来置き去りにされる孤立感を持っていた。

今後再び中山間地域に人が戻ってくることはありえないだろうということを人々は理解しているのである。しかし、自分が愛して生きてきた場所から近所の人が出ていこうとも、また世間から置き去りにされても自分はこの場所で最後まで生きたいと願う気持ちを持っている。これは個人の力ではどうしようもない外的社会的要因により孤立感がもたらされている状況といえ、中山間地域の人々の固有な心情として現れてきていた。

また、ハウス(1981)はソーシャルサポートを(1)情緒的サポート(価値、愛情、信頼、関心、傾聴)(2)評価的サポート(肯定、フィードバック、社会的比較)(3)情動的サポート(アドバイス、示唆、指示、情報)(4)道具的サポート(物品、金銭、労働、時間、環境を変更すること)と包括的な援助として捉えたが⁸⁾、その視点からみると過疎化していく中山間地域の人々はそれぞれのサポートを十分に受け難い状況であるといえる。そして、人は、他者のサポートなしには生きていけないものであり、「ある人を取り巻く重要な他者(家族、友人、同僚、専門家など)から得られるさまざまな形の援助(Support)は、その人の健康維持・増進に重大な役割を果たす」というソーシャルサポートの概念からすると⁹⁾、中山間地域という特徴のため、得られるサポートに制限をもたらし、孤立感へと結び付いていくことも考えられる。特に、中山間地域で生活している人々にとって、可動性ととともにアクセスが重要な問題となっていた。中山間地域ではないが、交通機関を利用して外出・移動できる老人の方が幸福感が高いこと(Larson, 1978)¹⁰⁾や、利用できる交通手段がないため外出できない場合は孤独感が高いこと(Tunstall, 1967)¹¹⁾などが報告されていることから、置き去りにされることに由来する孤立感は深刻な問題であると言えよう。

3) 中山間地域で生活する人々の夫婦関係の特徴

中山間地域で生活している人々が孤立感に陥っている時、「夫婦の存在」は心強い存在となっていた。「個人的な興味や関心が分かちあえる親密な人間関係の存在は、情緒的な幸福感の重要な源である。既婚の老人にとっては、しばしば配偶者がこの種の関係を結ぶ相手となる。(Parron&Troll, 1978)」¹²⁾というように、「夫婦の存在」は自分の不安を分かちあえる大切な存在であると言えよう。そして、その存在がいつまでも変わらずそばにあることを願うが、一方で人は年をとることで体力の低下、死へ向かっていることを考え、その支えが決して永遠に確実なものではないという気持ちも抱いている。そのことは、お互いのことを一層思いやる気持ちを抱かせるが、同時にその存在がいなくなることに對する不安も抱かせている。そのため、「夫婦の存在」は最も心強く信頼できる存在であるといえるが、その力の限界も感じている。特に、夫の側にその気持ちが強く表れており、最も頼りになる存在としている反面、率直に妻の存在が無くなった時の不安を表出している。それは家庭内活動における性差によるところが大きいだろう。性役割の社会化のため男女は異なる技術へ導かれる傾向にある。女性は家事の技術を学び、一方男性は、職業的な技術を獲得するのである。中山間地域においてはその役割は一層明確に分化している。しかし、人生の後半になると、性別による役割分化が固定してくることによって予期しない問題が生じる可能性が高まる。つまり、配偶者が動けなくなった時や亡くなった時、以前は配偶者がしていた仕事と責任を引き受けることに困難を感じるかもしれない。このことは、生活を維持する基本的な技術を獲得してこなかった男性老人や、そうした仕事を「女性的」として拒否してきた男性にとっては、深刻な問題であり、動けなくなることに對する不安、特に配偶者が動けなくなることに對する不安は増強するだろう。

4) 中山間地域で生活する人々の子どもへの思い

動けなくなることに對する不安を抱いた時、子どもを心のよりどころとしていたが、實質的に援助を受ける面では遠慮していた。【頼れる人の存在】の中で、「子どもの存在」は他と比べるとやや異なる存在である。「子どもの存在」では、多くは“最後は…”という言葉を使っており、最終的にどんなに頑張っても自分のことが自分でできなくなった状態や、終末期に子ども達にみてもらいたいという気持ちを抱いている。他の存在のように、普段の生活の中で直接的に頼りにしているというよりも、「夫婦の存在」「兄弟の存在」「近隣の人の存在」の力をまず頼り、最終的に「子どもの存在」に頼るという位置付けといえる。

この背景には、実際に多くの対象者自身が、自分の親の面倒をみるのは当然という認識を持ち自分の親をみてきたのだが、ソーシャルサポートを得にくい中山間地域で、健康に問題を生じた親をみていくことはかなりの負担・苦勞があり、そのような辛い生活を子ども達には二度とさせたくないという親としての強い思いがある。子どもには子どもの生活があると、子どもの生活を脅かさないようにと、寂しさを感じながらも子どもに対して過度な期待をしないようにと自制している。そして、心のどこかには子どもに頼りたいという気持ちもあるが、甘えてはいけないという我が子に対する親の優しさと、自分の力で乗り越えようとする強さをあわせもっている。そのため、子どもに対しては、直接的に頼りにしているというよりも精神的な支えとして頼りにしているといえる。だからこそ、子どもは遠く距離の離れた所に居ようとも頼りになる存在となっているのであろう。

5) 中山間地域で生活する人々の対人関係の特徴

中山間地域で生活する人々は、近所を、特に近所に住む兄弟を家族の拡大として捉え、具体的な支援を期待し、提供しあっている。それゆえ、動けなくなることに對する不安を抱いた時、同じ地域内に居住し普段からお互

いの行き来がある兄弟関係がもっとも頼りになる存在となろう。兄弟は血のつながりで結ばれ、この世に生まれてきてからどんな出来事であろうともその関係が失われるものではなく、最も気のおける、人々が自然体で振る舞える人間関係である。そして、自分は1人ではなく何かの時には必ず兄弟の力が借りられるという気持ちを生じさせる。このような存在がいることは、動けなくなることに對する不安を軽減させる方向へ働く。このような兄弟関係は、お互い別々の生活を確立した中で、お互いの生活を尊重しながら支え合う、自然に頼れる関係といえよう。

また、中山間地域で生活をしている人々にとっては地域の人々との助けあいは、なくてはならない生活の一部となっている。この中山間地域では、特徴的にみられた“鍵を閉めない。戸を開けっ放し。”というお互いの信頼に基づいた関係性が築かれていたが、これは地域社会が永年にわたって築きあげてきた「共同体」の機能が生き続け、中山間地域で大切にされている独自の親密な関係といえる。その関係の中で、日常生活では作ったものを交換したり普段の助け合いはもちろんであるが、さらに“人にもよるけど、あんまり見えない時は見に行ってみようかなと思う”というように、お互いに元気で過ごしているかどうかということを近隣同士で確認し合う行動にまでつながっている。これは、一方的な援助ではなくお互いに助け合う行動であり、孤立感への低下へつながる。アーリング(1976)が、成長した子どもや親戚との交際よりも、友人や近所の人との社会的交際の方が、孤独感の低下に寄与していると指摘していること¹³⁾、同様な結果を得ることができた。このように中山間地域において、動けなくなることに對する不安を抱えている場合、親族だけにとどまらず、地域の人々の親密な付き合いが残っているということは、誰かが気にかけてくれているという安心感を生み出し、互いに力を合わせ頑張ろうという地域の結束力も一層強めるといえる。

しかし、女性に比べると男性が近所の人と積極的に付き合うことは少ない。今回のケースでも、近所との付き合いは妻に任せている

というケースがみられた。それは、社会的活動における性差によるといえる。つまり、若い時、女性は家事や育児の責務があるため友人関係を築くことは男性に比べると制限されるが、男性は仕事のつながりから自然に友人をもたらせてくれる環境にいるため、友人形成は促進される。しかし、人生後半になると男性は仕事から引退し、男性がもつ友人関係は仕事から離れた途端減少する傾向にある。だが、そのためにまた新たな友人を積極的に作ろうとはしていないため、友人関係は少なくなる。特に中山間地域で生活する人々にとって「近所の人の存在」は重要なものであるが、男性にとって中山間地域にみられる近隣の人との強い結び付きを新たに築いていくことは簡単なことではない。そのため、男性は近所との付き合いを女性に任せる傾向にあり、女性に比べると「近所の人の存在」を直接的、積極的には頼りにしておらず、むしろ女性を通して「近所の人の存在」と交流をもち、頼りにしているといえるだろう。

3. 中山間地域で生活している人々の孤立感に対する看護への示唆

中山間地域で生活している人々は、孤立感に耐える取り組みとして「夫婦の存在」「兄弟の存在」「近隣の人の存在」「子どもの存在」を頼りとしていた。医療従事者として人々がこの頼れる存在との関係を保ち、促進していきけるように関わっていくことの重要性が示唆された。

また、孤立感を増強させる要因が明らかになったが、その中で特に置き去りにされているような地理的環境という視点から、行政や医療従事者を中心とした社会資源の開発、活用が必要であろう。

Ⅳ. おわりに

今回の研究結果から、中山間地域で生活する人々の孤立感と、孤立感を生み出している全体像が明らかになった。中山間地域で生活する人々の孤立感には、【自分自身が動けなくなることに根ざした孤立感】【家族が動けなくなることに根ざした孤立感】【置き去り

にされる孤立感】があり、この孤立感は、①地理的環境、②社会における中山間地域の位置づけ、③子どもとの距離感、により増強されていた。そして、このような孤立感に対して、①夫婦で互いに支え合う、②近隣の人との強いつながりをつくる、③兄弟を頼りに思う、④子どもを最後の砦とする、という【孤立感に耐える取り組み】をしていた。

<引用文献>

- 1) L.A.ペプロー, D.パールマン : LONELINESS:A SOURCEBOOK OF CURRENT THEORY, RESEARCH AND THERAPY, 加藤義明監訳: 孤独感の心理学, pp.4-23, 誠信書房, 1989.
- 2) Dean, L.R. : Aging and the decline of affect, Journal of Gerontology, 17, pp.440-446, 1962.
- 3) Larson, R. : Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans, Journal of Gerontology, 33, pp.109-125, 1978.
- 4) Perlman, D., Gerson, A.C., & Spinner, B. : Loneliness among senior citizens: An empirical report, Essence, 2(4), pp.239-248, 1978.
- 5) Tunstall, J. : Old and alone, London: Routledge&Kegan Paul, 1967.
- 6) Schulz, R. : Some life and death consequences of perceived control. In J.S.C arroll&J. W. Payne (Eds), cognition and social behavior, New York:Wiley, 1976.
- 7) Seligman, M. E. P. : Helplessness : On depression, development and death, San Francisco : Freeman, 1975.
- 8) House, J.S. : Work Stress and Social Support, Addison-Wesley, pp.23-26, 1981.
- 9) 久田 満 : ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題, 看護研究, 20(2), pp.170-179, 1987.
- 10) 前掲書 3)
- 11) 前掲書 5)

- 12) Parron, E. M. & Troll, L. E. : Golden wedding couples, *Alternative Lifestyles*, 1(4), pp.447-464, 1978.
- 13) Arling, G : The elderly widow and her family, neighbors and friends, *Journal of Marriage and the Family*, 38, pp.757-767, 1976.

<参考文献>

- Barbara Jones Warren: Explaining Social Isolation Through Concept Analysis, *Archives of Psychiatric Nursing*, 7(5), pp.270-276, 1993.
- 原岡一馬編：人間とコミュニケーション，pp.172-185，ナカニシヤ出版，1990.
- 懸田克躬編：現代精神医学大系第18巻<老年精神医学>，pp.397-438，中山書店，1975.
- 河合千恵子：老年期における配偶者との死別に関する研究その2－死別後の適応とそれに影響する諸要因の効果－，*家族心理学研究*，2(2)，pp.119-129，1988.
- Kimberly Blake : The Social Isolation of Young Men with Quadriplegia, *Rehabilitation Nursing*, 20(1), pp.17-22, 1995.
- 木下 謙治：家族・農村・コミュニティ，恒星社厚生閣，1991.
- 工藤 力，長田 久雄，下村 陽一：高齢者の孤独感に関する因子分析的研究，*老年社会科学*，6(2)，pp.167-185，1984.
- L. A. ペプロー，D. パールマン：LONELINESS : A SOURCEBOOK OF CURRENT THEORY, RESEARCH AND THERAPY, 1982, 加藤義明監訳，孤独感の心理学，pp.202-229，誠信書房，1989.
- Linda Carman Copel: Loneliness, *Journal of Psychosocial Nursing*, 26(1), 1988.
- 長田 久雄，工藤 力，長田由紀子：高齢者の孤独感とその関連要因に関する心理学的研究，*老年社会科学*，11，pp.202-217，1989.
- 長田 久雄，原 慶子，荻原 悦雄，井上勝也：老人の孤独に関する心理学的研究，*老年社会科学*，3，pp.111-124，1981.
- 野口 裕二：高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート，*老年社会科学*，13，pp.89-105，1991.
- 岡村 清子：高齢期における配偶者との死別－死別後の家族生活の変化と適応－，*社会老年学*，36，pp.3-14，1992.
- 大城 緑武：高齢期不安の認知の性差・年齢差・地域差に関する横断的研究，*民族衛生*，63(1)，pp.30-42，1997.
- 折茂 肇編：新老年学，pp.1013-1031，pp.1110-1140，東京大学出版会，1993.
- Winifred Windriver: SOCIAL ISOLATION: Unit-Based Activities for Impaired Elders, *JOURNAL OF GERONTOLOGICAL NURSING*, pp.15-21, 1993.
- 山崎 光博：高齢化に伴う農山村社会の変動，*社会老年学*，31，pp.59-68，1991.